

馬場孤蝶

漱石氏に関する

感想及び印象

漱石氏に関する

感想及び印象

夏目漱石君は長者の風のある人、客扱いのうまい人、人によって話をせられる人であった。雄弁の人は概して客には話させないものだが、夏目君は客にも話させ自分も話されるという方の人であった。私は明治四十年、森田君の家でお会いしたのが初めであった。私の宅へも二度ほど来られた、私も行ったがそう度々^{たびたび}は行かなかつた。七月（大正五年）中旬、上田敏氏の葬式のととき式場の入口で一吋挨拶したきり、それから一度も会わなかつた。

漱石君は実生活では複雑な変手へんて古こな生活をされなかつたが、ああいう人だから思想上ではいろいろの生活をせられた。実際当つた生活は割合に狭い。作物さくぶつの上に肉あり血ありと云う部分で十分でないということがあるとすれば、それは実生活に触れた点が余り無かつた所に原因することと思う。

君が後期の作物を見て感服するのは、書いたところに抜目なく、此処にもう一句あつたらば好く分るだろうとか、此処にもう一行欲しいとか云う感じの起らない点である。私どもは夏日君の注意力の広く精密に油断なく働

7

いているのを見て感服するばかりである。

夏日君は癩癩かんしやく持ちだという話を聞いた事があるが、そう云えばそう云う所もあつたろうと思う。が、一方から言えば、多分腹の立つような心持ちになつて来ると、その感情を抑えずにわざと口に出して見ることをやっていられたのではなからうかと思う。

頓才とんさいのすぐれて居られたのは誰でも氣のつく事であると思うのだが、演説とか講演とか云うものを聴いた人は誰でも皆夏日君の到意とうい即妙の頓才に感服したことと思う。門下の某君が自身の小説の中に「子を作るのは awful

なことである、何となれば自分の伝えて居る一切のものが子に伝えられ、子は亦それを子に伝え、その子は亦その次の子に伝えると云う風で、親が有^もっている凡^{すべ}てのものが永遠に伝えられて行く。子を有つのはオーフルなことである」と書いたときに夏目君がその某君に——「おれがクソをするとそのクソが野菜にかかり野菜が育って人に食われ、人の血となり肉となる。で、その人は亦子を作ると云うわけになる。故にクソの功果も永遠である。君の云う通りにすればクソをするのもオーフルだ」と言われた。で、その某君が夏目君は他人の熱心を打ち消そ

うとするのに、恋愛のところへクソを持ち出したのは如何にもうまい、これにはひどく閉口したと話した事がある。

大正九年頃前かと思うのだが、私は外濠線そとほりせんの電車で囚ならずも夏目君と一緒にあって、少しの間話をしたことがある。その時夏目君は自分の口髭くちひげと両鬢りょうびんとのしらがをさして「こんなに白くなりました、でも頭の真中は黒いのだが、この通り帽子を被ると肝心の黒いところは隠れて白いところばかり出ます」と言って笑って居られた。

人間五十頃になると、ああ云う夏目君のような理解力

の豊かな人が知人の中からなくなると、甚だ淋しい心持がする。私が明治四十四年頃に、小説を少し書いたことがあるが、三田文学に出た『屈辱』に就いては夏目君が好く其の作中の人物の心持を理解して門下の人々にも説明されたように聞いている。間接にも直接にも、私に小説を書けと勧めてくれたのは夏目君が一番度々たびたびであったように覚えている。吾々の行こうと思う方面で教えを乞うべき人であった夏目君の長逝ちようせいは吾々の如き所謂文壇の老朽者に取りつては特に損失である。

これは私ばかりの感じではなかろうと思うのだが、夏

目君がもう少し若い時分から作者生活を始められなかったのは残念な事であった。一方に於てはなかなか花やかな筆もあつたのであるし、感情に於ても決して乏しい人ではなかつたのであるから、その盛んに流露するような若い時代に於て筆を執り始められたのであつたら、もっと盛んな作物が出たろうかと思われる。夏目君の作物の如何にも結構布置井然せいぜんとしていて、作者は何処までも冷静であるというところに何等かの不満を持つ人々があるとすれば、其の人々は私どもと同じように夏目君の若い時分に作を始められなかつた事を残念と思う

であろう。

然しそんな事は隴^{ろう}を得て蜀^{しよく}を望むというのに過ぎないのであるから、我々は夏目君の与えられた丈^だけのもので満足すべきである。しかも十分満足すべき価値のあるものを夏目君が遺されたことには概^{おおむ}ね何人^{なんびと}も異存はあ
るまい。

要するに夏目君は人物として見ても作品から見ても全く特別な上等品である。手のこんだ念の入った品物である。出来合では決してない。随ってこれから先きも夏目君にひどく似たような人が出来ようとは思われぬ、尤も

それには時代を考量する必要があるのではあるが。

夏目君のことでは、思い出せば色々のこともあろうと思うのだが、今さし当ってはそう細かなお話をするわけには行かない。で、私の著書の中に書いた夏目君の事を左に引用する――



先生に始めて拝顔の栄を得たのは、明治四十年の冬頃かと思う。場所は、その時分森田草平氏の居た本郷の丸

山福山町四番地——故樋口一葉の住んだ家——であった。

その時に僕が受けた印象は、先生の態度は、話し振り等に籠って居る或る物が、故中江兆民、斎藤緑雨の態度、話し振り等に籠って居た或る物と同じであるという印象であった。二人の故人に共通であったウィットとしての風趣、即ち何処か飄逸ひょういつとでも云つて宜いような趣が漱石先生にもあるように感ぜられたのだ。が、その感じは、漱石先生に僕が始めて拝顔の榮を得た時の感じであつて、今日ではそういう感じは殆んど無くなつて居る。今

日では漱石先生の寛大な、温藉おんしやな方面が、より多く僕には感ぜられる。



漱石先生が帝国大学の学生で居られた時分には英文科の先生の組の学生というのは先生一人きりであった。所へプロフェッサア・ウードが英文科の教師として渡来せられた。ウード氏が始めて大学へ出席された日、漱石先生に教科書かれこ彼此は相談の上極きめるから旅館の帝国ホテル

ルへ来て呉れと云うのであつた。で漱石先生は外国人を訪問するのだからといふので当時の日本人の考でできるだけハイカラに仕立てて帝国ホテルへ出懸けた。尤も当時のハイカラは今日の蛮ばんからで、漱石先生其の日のおん出いで立ちといふものはその時分流行はやつた縮ちぢみの——節ときは夏である——折襟の前は紐で締めるようになって居る襯衣シヤツの上に直接にフランネル金釦きんボタン附の制服を着して居られたのだ。所でホテルではボーイに案内されて行くとウッド氏の寢室へ連れて行かれた。奇異な所へ案内するものだとは思つたものの、そういう習慣もあるものかと

思つて室へ入るとウード氏は「フン」とか何とか云つて一向に挨拶もせず室にある革鞆に指をさした。漱石先生には一向何だか合点が行か無かつたが多分は革鞆の中には書籍が入つて居るから開けて出せ、そうした上でいろいろ相談しようという意味であろうと推察したので、直ぐ立寄つて跪しゃがんで革鞆の蓋を開けた、所が中には襯衣だの衣服の古いのなどが一杯入つて居るきりで書籍らしいものは影さえ無い。何どうした事とも解らぬので、蓋を両手で押し上げたままでウード氏の顔を凝じ乎っと見あげて居ると、やがて氏は傍へ来て蓋に手を掛けて元の通り

蓋を為しようとするので漱石先生は直ぐに元の通りに蓋を下した。とウード氏は又また蓋に手を掛け開けようとするので漱石先生も一緒に蓋を持ちあげた。漱石先生には何の事やら一向に解らぬ。そういう同じ事を二度三度繰り返した後で漱石先生も堪こらえ兼ねて、これは一体何ういう訳なのかと尋ねた。ウード氏は「錠前が毀こわれて居る」と云う。漱石先生はますます解げせず「錠前は成なる程損じているが、その錠前の損じて居ることと我輩との間に何等の関係があるのか」と斯こう哲学的に尋ねた。するとウード氏は「でも御前は錠前直しだろう」と云った。漱石

先生ここに至って憤然と立ち上って「否」と答えた。所でその「Yes」なるものが如何にも激烈な調子で云い表わされたものなので、漱石先生その如何に錠前直しと呼ばれたのを憤っているかが明あきらかに知り得られたからウッド氏は少時呆れて漱石先生の顔を見て居た。がやがて「君はそれでは何ういう人なのか」と尋いた。「イヤ自分は文科大学の学生で、こうこういう用向きで来たのだ」と漱石先生が説明するというと、ウッド氏大おおに慌てて「ヤアそれは飛んでも無い間違いであった。実は錠前直しを待ち受けて居た所へ入って来られたので、一瞬にそうと

思つて誠に何うも失礼をした。疎忽そこつの段は幾重にも勘弁せられ度たい「I beg your thousand pardons」といふ様な事を云つて、改めて漱石先生を応接室へ通らせて書籍の相談をしたといふのである。一体ならば前日教場で差向いで話を為たのであるからワード氏は漱石先生の顔を覚え居るべき筈であるがワード氏は日本へ来たての西洋人に有勝ありがちな通り日本人の顔が皆同じに見えて區別が付かなかつたので、斯ういふ間違が起つたといふのである。漱石先生の云わるるには、その後西洋へ行つてから考えて見ると、自分の当時の服装は西洋人の眼で見たら何うし

ても錠前直し相当のものであったというのだ。

この話は僕等のようなウード氏によし半面でも識あるものには特に面白い。あの人柄な訥弁とつべんなウード氏が初め漱石先生を錠前直しと思つて扱かつた態度と、後の慌て方とが何と無く眼前にチラ付くような気がするのだ。

これは明治二十三年の秋かと覚えて居るが、本郷の若竹たけへ越路こしじが掛かつた。漱石先生はその時、令兄より拝領の外套——中古ではあるが仕立のなかなか良い——を着ちやくせられて大分得意で聞いて居ると、傍に安座あぐらをかいて居たへんな男が「今日は休みか」と尋ねた。漱石先生

は無論先方が此方こちらを学生と認めてそうきく事と思つて「今日は休みだ」と答えた。それから先方がいろいろのことをきくので相当の返答を為て居ると、段々話が喰い違つて来るようになって、これは少し異様へんだなど思つて居るうちに、到頭先方から判然はつきりと「お前は造兵ぞうへいへ出るのか」ときいたというのだ。この話は漱石先生が前の話ほど描写的には話され無かつたので是れ切りしきや書け無いが何にしろいろいな者に間違えられたものでは無いか。

これは明治四十年頃のこと、漱石先生の今の早稲田南

町の家へしかも庭先へ入って来て先生に逢い度たいというものがあつた。先生が出て見られると縁先に十四五の少年が立って居る。「用は何だ」ときくと懐から英語読本を出して、「読めぬ所があるから其所を伺い度いのだ」という。先生が「お前は俺の所へ来れば分かると思つて来たのか、それとも当て無しに来たのか」ときくと「多分分かるだろうと思つて来た」というのだ。——この問答では漱石先生の方が負けたという評である——で又「これから毎日ききに来る積りか」と問うと「いや今日だけで宜いのだ」というのであつた。で少年を縁へ腰掛

けさせて置いて英語読本の鳥が木の実を啄つつくというよう
な所を読んで遣った。前後を見ると一面に仮名が付いて
居る。鳥の所ばかりは仮名無しであるので何処でか習つ
て居るのかときくと、何処か牛乳屋かなんかに奉公して
居て、大学生の所へ夜学に行くのだが鳥の部分だけは欠
席して抜けたのでききに來たといふのであつた。少年は
二三ヶ月前に田舎から出て來たものであつたそうだ。夏
目氏の直話を聞いた時には非常に面白く思ったが僕の取
次では何うも十分にその興味を伝えることのできないの
は残念である。



これは又聞きの物語であるのだが、漱石先生が帝国大
学で教えて居られた時学生の中に一人何時いつも隻手かたてを懐に
したままで講義を聞いて居る者があるのに漱石先生は氣
が付いた。一面に於て潔癖な几帳面な漱石先生は、その
学生の姿勢が甚ひどく癩ひどに触ったと見えて、或る日の講義中
に講壇を降りその学生の傍へ行つて「手をお出しなさい」
と少し鋭とがった声で云つた。学生は顔を赤くしたのみで、

何とも返答せず、又手も出さ無い。漱石先生更に強く「手をお出しなさい」と云った。が学生は一層赤くなり魚の如く黙して居るのみで、どうしても手を出さ無い。漱石先生も為方しかたが無いものだから講壇に戻って如何にも不機嫌そうな様子で講義を終った。

と、その後になって何時も手を懐に入れて居た学生の友人が漱石先生の家へ行つた。そうして、その友人は、その手を出さ無かつた学生は手を怪我して居る男なので手を出さ無かつたのでは無くして手が出せ無かつたのだ。と、漱石先生に向つて説明した末に、その友人は「下

世話にも、無い袖は振られ無いと云うではありませんか」と警句一番した積りで云った。

真面目な漱石先生はその学生に対して甚くひど気の毒がった。が、重厚なる紳士漱石先生は唯まことに悪るかった。気の毒なことをした、先方へ宜しく僕に代って挨拶して呉れ給え、と云うような意味のことを云うだけでは——普通の人がそういう場合には大抵云うようなことを云うだけでは——漱石先生自身気が済ま無かった。漱石先生は此の際自分をも笑って了しまい度たかったのだらう——伝者はそう云って居る——漱石先生は渋い顔をして斯こう云

つた――

「僕等は無い学問を出して講義をして居るのだ。……君も気が利かんでは無いか。無い手位出して呉れても宜いのに」



それからまた筆記のことでは、余程面白い話がある。明治四十二、三年の秋あたりかと思うが、夏目君の所へ行って、雑談をして居るうちに、夏目君が「先日『文章

世界』の記者が来て、談話を筆記して帰ったが、その載った雑誌さえ送って来ぬ。一体談話に対して報酬をせぬと云うのが大分議論のあることなんだが、それは、まあ宜いとしても、その談話の載った雑誌さえ送らぬと云うのは、怪しからん」と云わるる。予は「それが怪しからんどころでは無い。僕に云わすと、全体談話に報酬をよこさんと云うのが、第一怪しからん訳だ。或る雑誌などからは、立派にその雑誌記者だという名刺を持ってやって来る人があるけれども、實際を聞いて見ると、その人の報酬は、持って行く談話筆記の量で極ると云うんだ。で、

左様いう人に訪問せられた際には、此方は、ヨクヨクの場合で無ければ断り兼ねる。われわれの談話で、或人が学資を得るとか、下宿料の補足でも得るとか云うのであるのに、格別な差支も無くして、ムゲに断わると云うのは、少々スゲ無い訳だろうと思う。

で、大抵の人は少々厭な位なことは堪らえて談話をする。所で、その談話だってもそう出鱈目ばかりもやれぬのであるから、考えるなり、調べるなり、相当の労力はこれに費すのは勿論で、書くのと、話すのとは、労力の差はあろうが、決して、質の差は無い。その雑誌営業

者が、談話筆記者に対して、われわれの原稿に対すると同率の報酬をするのであれば、われわれには異存はないが、営業者は、大抵、談話筆記者にはズツト少い報酬を与えて居るようだ。左様すると、其様な雑誌社のやり方は、極言すれば、世間には往々ある苦学会とか孤児院とか云うもののうちの、苦学生とか孤児とか称えるものを売子にして、割高に品物を売り付ける金儲法と同じだ」と、予のことだから、無遠慮な説を持ち出すと、夏目君は莞爾にっこりしながら「一体談話を載せると云うことが、面白く無いね。文人の説を載せて貰たくい度ば、原稿を書かせる

ことにしたら宜いでは無いか。不用意な所を襲つて、何か云わせて、それを麗々しく、一廉の意見かのように載せて居るのは、読者を欺くに等しい」と云う。予は「イヤ、左様ばかりしも云え無いよ。例えば、夏目漱石先生のお説などには、談話筆記でも無ければ、滅多にお目にかかれぬし、不肖馬場孤蝶の説だつても、談話筆記が無かつたら、余り世には出無い。のみならず、論文を書か無い文人の説などは、談話筆記より外に、得て来る方法はなからう」「併し、君だの僕だののような境遇の者は、文壇にそう多くは無い。論文を出さん人が多いのは、小

説以外のものの原稿料が比較的安いからだろう。若し、小説以外のものに、長さの制限が今のようになく、報酬も小説同様だったら、今少し論文を書く人が多くなる訳じゃア無いか」「御道理。ごもつとも だが、論文を何うしても書かやっぱりん人は尚且出来るね。談話の出るのはまア宜いじゃ無いか。世間も面白がり、雑誌営業者も随って喜び、筆記者も何等かの金を得ると云う訳なんだからそういう善徳の為なら、少々杜撰でたらめなことを云っても宜かろう」と予が云うと、夏目君は噴出して「夫れじゃア、談話料をウンと取るかね」「結局其処だ」と、予も声を合せて笑った。

一寸断つて置くが、夏目君と私と談話を為ると、大抵、此様な風に結末が付く。即ち、予の方が、無暗に饒舌しやべり立てるので、夏目君の方から、宜い頃合を見て、旨く切りあげて了しまうのだ。

その時分は、前田夕暮君が『文章世界』の用で、屢よく予の所へ来られるのであったから、同君を捉まえて、散々間接射撃で『文章世界』の談話の扱方に関する不平を述べた。そのお蔭だか、何だか知らぬが、予の『ガルシンと其作物』に対しては、博文館から礼だとして四円の為替券を送って来た。流石にそうなって見ると、少々気の

毒のような気もした。



その後、夏目君の家へ行った時に『文章世界』はいよいよ来無かったかと聞くと、夏目君は笑い出して「あれは飛んだ間違でね。実は雑誌は来て居た。森田（草平）が、僕に云わずに持って行ってたんだ。あれから『文章世界』の記者が来たから散々小言を云ったんだが、その時には、森田も居た。そうすると、二人とも帰ってしま

った後で、家の者が「雑誌は文章世界なんですか」と云うから「左様だ」と云うと「森田さんが見てお居でのようでした」と云うんでね。それから、その次に森田が来た時に「僕の家『文章世界』を持って行ったのは、あの雑誌の記者の来た前なのか、後なのか」と聞くと、前なんだと云うんだね。「そりゃア、君、不可じゃ無いか。僕が、記者を叱ってる席に君は現に居ながら、その事を何とも僕に云って呉れんと云う法は無い。君は、僕が、知らぬとは云え、人をアンジャストに扱ってるのを傍観して居るのは、不親切極まる。第一、君は、僕に断ら

ずに、僕宛の雑誌などを、開封して見るとというのが怪しからん」と云うと、大に恐縮して居たがね、相更らず気楽な漢おとしだ」という話であつた。大分森田氏の特調を発揮した話なので、予も噴飯ふきださざるを得無かつた。

夫から、一週間程して、森田君が、私の所へ来たので、「夏目君に『文章世界』のことで叱られたそうだね。何うも、自分の過失が原因で他人の叱られてるのを、平気で傍観して居るなんて、君も大分悪漢になったじゃア無いか」と云うと、森田君は、頭を搔いて「イヤ何うも大失敗。夏目先生に合槌を打って、散々記者を叱責いため付け

たんだからね。これ位悪党になつたまえば世話はありません」云つて、笑い出した。それから、森田君は「此の間も『煤煙』のことで、酷くやつつけられました」と云う。「そうかね。君『煤煙』が拙いでも云うのかね」ときくと「否。左様云うんじやありません。行くという」と「君は『煤煙』で見ると、僕の用を頼んだ時分にやア、女と歩いてばかりいたんだね。だから、僕の用がちつとも片付か無かつたんだ」と云うような芸術とは一向関係の無い方面から、まるで滅茶苦茶に叱られたんです。多分、誰かが行つて「森田は『煤煙』の評判が宜いから、

大分得意のようだ」とでも云ったので、先生「夫りやア生意気だ。来たら一つやつつけて遣れ」というんで、手ぐすね引いて待ち構えて居る所へ行つたという訳なんです。何うも頭ごなしに立つ足も無くやつつけられたんです。で、私は「先生、それは無理です。『煤煙』では、一日の出来事が九日も続いて出るので、一寸見ると、其様なことを九日も続けてやっていたように見えましようが、実際は唯だ一日の出来事なんです。だから、『煤煙』のようなことを一日やつちやア、先生の仕事を二日やる」と云う風にしていたんで、先生の仕事を全然放棄うつつちやつとい

た訳じやア決してありません」と、云いました」

斯う書いたばかりでは、森田君が夏目君に何時も凹へこまされてばかり居るようだが、実際は、森田君は、夏目君の舌戦の相手としては、時になかなか手強いことがある。夏目君もこの漢おとし、語るに足ると云う態度で森田君に対するので、種々な話が伝わる訳である。

日本文学電子図書館

漱石氏に関する感想及び印象

著 者：馬場孤蝶

制作者：宮澤一郎

底 本：「明治文壇の人々」、
ウェッジ文庫版

2009年10月26日 第1刷発行

日本文学電子図書館